

大正期の『少年倶楽部』掲載ロシア関連記事の分析

丸 尾 美 保

大正期の『少年倶楽部』掲載ロシア関連記事の分析

丸 尾 美 保

An Analysis of Russia-Related Articles in *Shonen Kurabu* during the Taisho Era

MARUO Miho

はじめに

隣国ロシアは、明治以来、日本の近代化の過程に密接な関わりを持ってきた。日露戦争で日本が勝利したことは国民に欧米各国と比肩するという自信を抱かせる大きな経緯となった。文化面においてもトルストイやドストエフスキーを初めとする文学や、チェーホフの演劇などは日本に多大な影響を与えている。

大正期は、1917（大正6）年にロシア革命が起こり、その後日本がシベリアに出兵するなど、ロシアとの関係が複雑化した時期であった。国内にはロシアから逃亡した白系ロシア人が流入し、満洲やロシア沿海州でも、大陸に移住した日本人の身近にロシア人が暮らしていた。

日本人のロシア・ロシア人観は時代によって顕著に変化しており、日本人のものの見方や自意識を鏡のように写し出している。このことは、明治以後の児童を対象とした出版物に見られるロシア関連記事においても同様であった。

大正期のロシア観を考察する一例として、1915（大正4）年に創刊して戦後まで絶大な人気を得ていた『少年倶楽部』（大日本雄弁会講談社発行）の記事の分析を試みた。

分析するに当たって『少年倶楽部』の記事をノンフィクション（1 知識、2 時事報道、3 実話）とフィクションである文芸作品（1 昔話、2 読み物）、その他に分類し、考察を行った。また『赤い鳥』などとの比較を通して『少年倶楽部』の特徴を明確にし、ロシア革命の伝達についても考察する。

1. 『少年倶楽部』概略とロシア関連記事の分類

大日本雄弁会講談社発行『少年倶楽部』は、1914（大正3）年11月に創刊した。創刊号の「発刊の日に」には、「^{やさ}しさと^を雄々^かしさを兼ね備へ」「一旦^{たんくわんきふ}緩急あれば、^{ねつれつ}熱烈なる意氣、焰々として^{てんち}天地をも^や焼^{つく}き盡さん」という理想の少年像が提示されている。「本誌の編集方針」¹ [社主・野間清治] には、「面白く讀む中に知らずへに或種類の教育を受くる」「德育の中心信條として「偉大なる人」にならねばならぬ」と記されており、理想の少年を雑誌で育成するという編集目

的が表明されている。

『少年倶楽部』は大正期（便宜上創刊号～1926（大正15）年12月号とする）に159冊発行された。（内、5巻5号、6巻6号、6巻13号は未見。）当初は『日本少年』（実業之日本社）に発行部数で劣っていたが、加藤謙一が編集長になった後は発行部数を伸ばし、1925（大正14）年の新年号は40万部を発行している²。

ロシア関連記事を分析するに当たっては、ロシアやロシア人に関係するものを拾い出し、内容によって分類した。ただし、日露戦争に関係した記事はロシア及

びロシア人に直接関係していないものも含めた。おおむね1ページ以上の記事数は表①の通りである。

表① ロシア関係記事数

1. 事実記事	113
1 知識	37
①理科・社会	2
②偉人伝	35
ロシア人	6
日露戦争(日本人将兵)	25
その他	4
2 時事・ルポルタージュ・実話	76
①時事	5
②ルポルタージュ	4
③実話	67
ロシア人やロシア関連	4
日露戦争関連	61
その他	2
2. 文芸作品	72
1 ロシア昔話	3
2 ロシア人作家の作品	4 (作品数2)
3 日本人作家による創作	65
①ロシアやロシア人・日露戦争など	60 (作品数27)
②ロシア革命・シベリア出兵	5
3. その他	8
1 口絵・表紙	3
2 投稿・作文	3
3 その他(漫画・書評)	2

2. 事実記事(ノンフィクション)について

当時の日露間の情勢を概括しておきたい。大正初期は日露協約により友好的な関係が続いており、1914（大正3）年に勃発した第一次世界大戦では、日本とロシアは連合国側としてドイツなどの同盟国と戦った。その最中の1917（大正6）年にロシア革命が起こり、1918年から22年まで日本はシベリアに出兵した。1920（大正9）年には、アムール川河口近くの町のニコラエフスク（日本名で尼港）でパルチザンによる虐殺が起こり、日本軍や日本人が多数殺された（尼港事件）。日本がソビエト・ロシアを承認し、国交回復したのは、1925（大正14）年1月であった。

1) 「知識」に分類した記事

理科や社会の記事と偉人伝を「知識」とした。目をひくのは、1916（大正5）年7月号の阿武天風作「樺太珍聞物語」で、海軍少尉の天風が見聞した日露戦争末期の樺太（当時ロシア領）の風物をユーモラスに記しており、ギリヤーク人部落を訪問したエピソードも綴られている。

偉人伝としては、ピョートル大帝が2度記事になっている。明治期もロシアを近代化したことで少年雑誌に度々伝記が掲載されていたが、理想を持ち続けたことや仁徳があったことが賞賛されているのが明治期と異なっている（長瀬鳳輔「(英邁／無比)彼得大帝の冒険」1921.4）。

他には3人のロシア人文豪（トルストイ、ドストエフスキー、ゴーリキー）の伝記が掲載され

ている。トルストイについては、高島平三郎(1865-1946)が「愛の心」を説いたことを記し、子供の頃の乗馬のエピソードを2件紹介している(1915.12)。高島はドストエフスキーについても、死刑台上ったエピソード(政治犯であったことは記さず、友達の巻き添えをくったためと説明)を伝えているが(1916.12)、ふたりの文学に関しては紹介されていない。ゴーリキーは、矢野龍瘦の「世界英傑傳」連載シリーズの一篇として掲載されている(1919.5)。作家になるまでの苦勞を語り、無知蒙昧な労働者に同情して眠っている心を覚まそうとしたために圧政のロシア政府からじゃまにされていたと記している。



「レーニン物語」1919.7

レーニンについても同シリーズで同年7月号に「(世界／人物傳)レーニン物語」が掲載されている。「立志傳中の人物として」少年時代を描いたもので、出身地、本名、新政府の首脳であること、主義のために奮闘していることが書かれているが、その他は、ドイツのスパイである刀鍛冶の下で暮らしていたなどと、事実に基づかない冒険読物風の内容になっている。「レーニンの奉ずる主義について、之を是非するのは容易ではない」として思想面には触れていない。顔写真が掲載されており、話題の人として取り上げられたものと推測する。記事の情報源や作者矢野龍瘦の経歴などについては調査中である。

2) 時事報道・ルポルタージュ・実話

① 時事

時事報道は、ニュース記事の中にシベリア出兵に関連したものが5件見られ、日本人居留民の保護などと出兵の正当性について解説している。時事解説記事「(新聞／くらぶ)新時事研究」(永川俊美、1918.3)では、ケレンスキーから「過激派のレーニン」に政権が移ったことが報道されて、先の「レーニン物語」と同じ写真が掲載されている。

なお、1924年9月号の「新知識の寶庫」(豆知識を列挙した記事)に、外国にいる日本人の数はアジアロシア(ウラジオストックなどの極東地域など)が第4位で4万人、また日本にいる外国人の数も、ロシア人は第4位で840人となっている。1925年2月号の「サーチライト」では、「祖国の暴政より遁れし露人五十四名、神田紅梅館に哀れ放浪の夢を結ぶ我々が楽に暮すは國の恩」と、亡命ロシア人に関する情報が、日本人の優越感と組み合わせられて報道されている。近年の研究では、来日した白系ロシア人は1918年1年間だけでも7,251人を数え³、多くは他国に亡命する中継地として日本を通過していった。シベリアや中国にいたロシア人も商業を目的に来日し、ラシヤやロシアパンなどの行商をしていたという⁴。

② ルポルタージュ

シベリア出兵の時期の1918、19年に、支那人に化けてパルチザン占領地に潜入した本間憲一郎のシベリア奥地偵察の記事が2度掲載されている⁵。シベリア出兵の時期に起こった尼港事件については、1920年9月号に時事新報の特派員近藤貞吉によるルポルタージュ「(黒龍／江畔)虐殺の濱」が、写真を添えて3頁にわたって掲載されている。パルチザンが日本人居留者などを殺害し放火して去った直後に、町に入って取材した生々しい報告である。

ロシア文学者の昇曙夢(1878-1958)の寄稿した「哀れシベリヤの兒童」は、1920(大正9)年夏

に、ウラジオストックやハバロフスクに旅行した際に見た、革命後の子どもたちについてのレポートである。不安定で困難な状況の中でも日常生活が続いていた様子が読み取れる。大正期を通して『少年倶楽部』にはシベリア以外のロシア体験記事は見られない。

③実話

実話は、ロシアやロシア人に関係したものと日露戦争に関係したものとに分類した。ロシアやロシア人に関係した実話は4件と少なく、日露戦争関連は61件であった。

ロシア人関係の実話には第一次世界大戦に関連したものが2件ある。陸軍少将伊崎良熙作「(戦争／美談)陣頭の勇士」(1916.3)は、12歳のロシア少年が敵陣で妨害活動をしてゲオルギー勲章を授与されたことがヒロイックに描かれている。丸井三郎「コルニロフ將軍の脱走」(『秋季増刊・英傑号』1917.10)は、オーストリア軍の捕虜となったコルニロフ將軍の活躍を冒険読物風に書いたもので、日露戦争の勇士でもあったコルニロフ將軍が勇猛で慈悲にあふれていると、賛辞を贈っている。

「(事實哀話)母の瞳と語る」(桐山遊太郎手記・石川星影(補)、1924.5)は、ロシア人を父に持つ少年が、父を訪ねてモスクワに行ったものの既に父は亡く、帰国すると母も他界していたという内容で、高島華宵の挿絵の力が加わって悲哀感が増幅された作品である。日露戦争後からロシア人は、敗者の悲哀・不幸のイメージで描かれることが多くなったが、ロシア革命後には亡命ロシア人の運命も重なって、悲劇や悲哀感が主要なモチーフとなっていく。

中で異色なのは、1922(大正11)年10月号に掲載された、ヴォルガ地方の飢饉を伝える「人が人を喰ふ ロシヤの大飢饉」であった。著者は社会主義者・堺利彦(1871-1933)である。5頁にわたって堺は、3年越しの飢饉で何百万人も死んでおり、人肉を喰うことまで行われていると知らせて日本の援助や寄付を訴え、「ロシヤは貧乏人の國、労働者の國と云ふが、日本の貧乏人、労働者として、夫をコハがる理由がない。(中略)世界中の貧乏人や労働者は、貧乏人同志、労働者同志として、殊にロシヤの國に同情すべき筈である」と記事を締めくくっている。餓死者1千万人とされるウクライナの飢饉は、当時複雑な政治情勢をはらみながら、欧米で救済活動が行われていた⁷。日本でも1921年の終わりから労働者の組織や社会主義に共感を持つ人びとが飢饉救済運動を始めており、堺利彦はその中心的な人物であった⁸。

記事に掲載された3葉の写真は、餓死した遺体を引きずる姿や人骨などが写されたもので、印刷が悪いためにかえって怖さが増している。この記事は、特集「(珍奇づくし／びっくりづくし)世界漫遊壮快談」9編の最後に掲載されたものだが、他の記事が「アメリカの自慢ばなし」や、南洋の象狩り、ロンドンの観光案内などであるため、異色さが際立っている。堺は熱を込めて少年たちにロシアの飢餓救済を訴えて貧乏人や労働者同士としての同情を求めているが、読者の大多数は怖いもの見たさの興味で読んで、ロシアは悲惨な恐ろしい国という印象を持ったのではないかと推測する⁹。堺は明治期に『少年世界』等に少年読み物が掲載されたことはあるが¹⁰、社会主義思想の伝達が主題ではないとしても、こういった社会問題を取り上げた記事の児童誌への寄稿は、現在までのところ他に見られない。記事の掲載には読者投稿欄の短文の選者をしていた秋田雨雀が関係していると想像されるが、経緯は不明である。

日露戦争実話としての戦記は、従軍した櫻井忠温(陸軍歩兵中佐)や原田指月(陸軍歩兵中尉)などが、経験を様々に語っている。その中で、鉄橋破壊の目的で蒙古に潜入した12人の軍事

探偵の事績（沖と横川はコサックによって処刑）が4度掲載され、戦争冒険物語の定番となっていたことが確認される。大正末期になると、事実をもとに勇壮に脚色した戦記が「実戦美談」として掲載されるようになる。黒髯中尉（経歴等不明）の描いた「(戦争／美談) 決死の斥候」(1925.12)、「(日露戦争) 雪中夜襲血戦記」(1926.1)は、ヒロイックに忠君愛国を讃美している。

明治期の児童雑誌の日露戦争記事に比べると、ロシア軍が軍事面・人格面でより高く評価されており、そのロシア軍に勝利したことで日本の優越感が増すという文脈となっている。

「時事・実話」に分類した記事から浮かび上がるロシアは、日露戦争の敗戦国で、革命の混乱のなか過激派が残虐行為を行っている恐ろしい場所のようであるが、情報が少ないために実態は不明である。日露戦争や第一次世界大戦で勇敢だったロシア人が、革命後は亡命者となっているという対比から、哀れな同情すべきロシア人というイメージの構図が見て取れる

3. 文芸作品(昔話・フィクション)について

明治末期からロシア文学が多数翻訳されて、トルストイやドストエフスキーがブームとなり、大正期にはアンドレーエフなど自然主義的傾向の作家やソログレーブなども新しい文学として紹介されていた。芸術座で上演された『復活』（トルストイ原作）で歌われた「カチューシャの唄」が流行し、大正末期には築地小劇場でチェーホフやゴーリキー作品の公演も行われている。

児童のための文芸をめざした『赤い鳥』などに較べると、『少年倶楽部』にはロシア昔話やロシア文学の紹介は少ないが、創作読物の中には時代を反映したのが見られた。

1) ロシア昔話

ロシア昔話は、3編が掲載されている。杏花生作「(お伽／新話) 鐵^{てつ}狼^{おおかみ}と勇犬^{ゆうけん}」(1915.11)は、R. Nisbet Bain作 *Cossack Fairy Tales and Folk-Tales*, 1894所収の"The Iron Wolf"の再話と思われる¹¹。話を短縮し、結婚のエピソードを除いて再話している。巖谷小波が「世界お伽噺」第36編コサックの部に「鐵の狼」として掲載したのと同じ話であるが、小波の改変は踏襲されていないので、新たに再話したものと判断する（この原著から寺谷大波も博文館「世界お伽噺」叢書として再話している¹²）。本文5ページの上部に2色刷りで絵巻風に内容が図示されており、当時の絵雑誌に通じる洒脱さが感じられる。

昇曙夢訳「意地悪女房（ロシヤのお伽噺）」(1920.9)は、性格の悪い女房から逃れるのに悪魔を利用する話で、アフナーシェフ「ロシア民話集」からのほぼ全訳である¹³。

岡田刀川作「悲しい約束」(1920.12)は、アンドルー・ラングの *The Green Fairy Book* に入っている"King Kojata: from Russian"(コジャタ王)の再話でロシア昔話である。（底本の挿絵をほぼ踏襲していることから推定¹⁴。）この話も後半部分が省略されるなど短くなっている。

「意地悪女房」以外の2話は、ロシア関連の話とは記載されていないため、出典などには無頓着に、面白い読物として掲載されたものと思われる。アフナーシェフから曙夢が再話した「意地悪女房」は、こっけいな世態譚で本格昔話ではなかった。ロシア昔話の掲載が少ないことは、『少年倶楽部』の特徴のひとつと考える。

2) ロシア人作家の作品

ロシア人作家の作品は、ワシリー・エロシェンコ（1890-1952）の2作品のみである。「智慧の壺（つば いんど とぎはなし 印度お伽噺）」（1920.11）は智慧のある大臣と王様の話、「ビルマの傳説」（1921.1～3）は、古代の神々の複雑でまか不思議な話で、2作ともエロシェンコ特有の自由へのあこがれや人類愛・世界平和の希求といった寓話性はあまり見られない。ただ、「智慧の壺」では王様のけちなところを笑ったために追放された大臣が再度重用されることになる内容に、専制君主への批判的な目を読みとれる。また、「ビルマの傳説」の冒頭に、大臣が知恵を働かせてイギリス人技師を追い返したエピソードを置き、英国がこのときから「何としても、この國を自分のものにしなければならぬと、私に計畫を定めたのでございます」と記した文章に、植民地主義への反感がうかがえる。2作はエロシェンコが1916年から19年に東南アジアを旅した際に収集した伝説をもとに書かれたものである。エロシェンコの作品は、『少年倶楽部』以外の児童雑誌には掲載されていない¹⁵。

3) 日本人作家による創作

① ロシア人やロシア革命を扱った創作作品

そのうち主なものを表②にまとめた。明治期から「忠僕」として知られている話（使用人が身を犠牲にして狼の群れに追われた櫓の主人を救う）が2度掲載されている。第一次世界大戦中には、ロシア人がドイツ軍を相手に活躍するフィクションが2作掲載されている。

ロシア革命を描いたものとしては、コマを使った絵ばなし形式で描かれた吉岡貫一郎作「（活動／写真）革命騒動」（1918.6）が最初で、修羅の巷と化した町に行き、パンにしこんだ爆弾で革命党をやっつけるというドタバタ喜劇の題材とされている。望月紫峰「（秘密／小説）コサツク魂」（1919.1）は、コサツクの少年が父の敵である過激派頭領に爆弾を投げて勇敢に死んでいったことを、筆者が目撃したというフィクションである。2作品とも革命を起こしているのは、残虐な過激派で市民の敵であるという認識は一貫している。筑波四郎「（探偵／腕くらべ）魔人

表② 日本人作家による創作

出版日	タイトル	作者	内容
1917.1	（戦争／お伽）敵の機関銃を担いで	小柴博	第一次世界大戦
1917.4.10 春期増刊	（冒險軍／事小説）梅花少年	大原武夫	第一次世界大戦
1918.6	（活動／寫眞）革命騒動	吉岡貫一郎	革命・滑稽
1918.10～1919.3	（熱血冒／陰小説）密獵怪船	宮崎一雨	オホーツク・ロシア人
1919.1	（秘密／小説）コサツク魂	望月紫峰	革命・ロシア人
1919.7.10 夏季増刊	（探偵／腕くらべ）魔人團	筑波四郎	秘密結社
1920.2	課外讀本 第一課 忠僕	作者名なし	「忠僕」
1920.7.10 夏季増刊	（熱血／小説）決死の使	宮崎一雨	シベリア出兵
1920.11	ローマ字クラブ KOSAKKU NOKO	櫻根孝之進	コサツク
1921.9	日本少年の義膽	大瀧九二雄	樺太
1923.1～1924.1	（熱血小説）馬賊大王	宮崎一雨	日露戦争
1924.4～1925.3	（熱血小説）蠻勇快傑	宮崎一雨	シベリアからアジア
1924.6	（泰西／美談）荒野の墓標	木村小舟	「忠僕」
1925.1～1925.4	曠原の俠少年	阿武天風	満州・ロシア人
1925.12	血に染つた指	南達彦	ロシア人
1926.1～1927.11	（愛國小説）太陽は勝てり	阿武天風	未来戦・ロシア人

團」(1919.7.10夏期増刊)は、ロシアに帰化した日本人スパイが探偵を煙に巻いて姿を消す話で、労働者の側に立つ義侠心のあるスパイに対する善悪の判断はあいまいのまま終わっている。

ロシア人に関連して、悲哀感がたどよう話が3編あった。櫻根孝之進「ローマ字クラブ KOSAKKU NOKO [コサックの子]」(1920.11)は、ローマ字書きで草原を馬で行くコサックの親子を叙情的に描写したもので、レールモントフ作詞の「コサックの子守唄」から題材を得たと推測される。大瀧九二雄「日本少年の義膽」(1921.9)は、樺太に住む日本人少年がロシア人の養子になって苦勞する話、南達彦「血に染つた指」(1925.12)は孤児のロシア少年が自分の指を犠牲にしてサーカスの親方を救う話である。

②宮崎一雨と阿武天風の連載小説

表②にあげたロシア関連の読物16編のうち、4編の連載小説を宮崎一雨(生没年不明)が書いている。一雨は忠君愛国の「熱血小説」を多数執筆した作家であった¹⁶。「(熱血冒険小説)密獵怪船」(1918.10～1919.3)では、北洋の密獵船のボーイになった哲哉少年が、ロシアの密獵船に命を救われる。ロシア船員は「君達の男を潰すやうな事は斷じてしない、安心して來給へ」(1919.3)と言って救助してくれる信義に厚い人間として描かれている。

「(熱血小説)馬賊大王」(1923.1～1924.1)は、日露戦争前に大陸に偵察に出かけた大八少年が馬賊となった日本人の助けでロシア軍備地図を手に入れて、戦争を背面から援助する。旅順のロシア兵を「威張る露助」「意地汚ない」とし、秘密を漏らした将校を「酒を吞まずには居られない露西亞人の事であるから、いい年をして、ヘレレケに酔ひ往來を蟹のやうに横にのたくつてゐる」と描写する(1923.6)。その一方で、敵対するロシア将校は冷静沈着な男に描かれている。

「(熱血小説)蠻勇快傑」(1924.4～1925.3)では、国を憂える15歳の頑鐵少年が、武者修行として入ったシベリアで狼と戦い、山賊のロシア人流刑囚を退治する。5年後には豪快なロシア人と一緒に、幽閉されていた王をオデッサから救出する。

シベリアやロシア人をモチーフにした一雨の意識の底には、日本の領土的野心の対象であるシベリアや、粗野なロシア人といった明治以来のロシア観・ロシア人観があったことが確認されるが、ロシア人のイメージが悪役に限定されていないのは大正という時代背景が反映していると考ええる。ロシアに関連した一雨の冒険小説は、定型化された登場人物と既視感のある筋立てで、新鮮味は少なかった。

阿武天風(1882-1928)のロシアに係した連載小説は、2編である。「曠原の俠少年」(1925.1～1925.4)は、北満洲を舞台に、中国人の馬賊に捕らえられた勇少年が、やはり捕虜になっていた父とロシア人ナターシャ嬢を助け出す。伐採事業を行っている父の元へロシア人が運転するトロッコで出掛け、ロシア語で「スカレー、スカレー(早く)」「ハラショ」と会話しながら進んだり(1925.1)、ナターシャの父が森林伐採業の林区の権利を所有している(1925.4)など、天風がハルピンに暮らしたことがあるせい、ロシア人や満洲の描写に現実感がある。天風は英語が使えたというが、ロシア語からの翻訳書も出版しているため¹⁷、ロシア語の知識もあったと推測される。天風は1918年に武俠世界社の特派員としてシベリアに出かけ、その後ハルピンで『西伯利亞新聞』を経営していたので¹⁸、シベリアへの関心も強かったことがうかがわれるが、作品には結実していない。

「(愛國小説)太陽は勝てり」(1926.1～1926.12)は未完に終わっているが、実在した外国人を

含む多数の登場人物を配して、蒙古や印度の独立を日本が援助して共栄圏を作って英米と対抗するという、天風の政治的な活動や夢が盛り込まれた壮大な内容である。脇役で登場するロシア人博士ミリウコフとウラジミール少年は、シベリアで過激派から日本軍に命を救われたことを恩義に思っているという設定で、博士は「猛毒バクテリア」を発明して手助けをする。小説の中で天風は、「ニチエオウ」（まあ、いいじゃないか、そんなにやかましく言うな）というロシア人の口癖を紹介し、「露西亞人一流の吞氣ロシヤじんいちりうのんきさ加減かげん」がよく表されているとする（1926.8）。ロシア人に接した経験から出た言葉と思われ、好意的と同時に揶揄的でもあった実地のロシア人観がうかがえる。終盤の翌1927（昭和2）年になると、日本とソビエトとの共闘を構想しており、黒海沿岸から石油を輸入し、北樺太の油田の利権を得るなどの計画が語られる。日ソ基本条約（1925）による国交正常化を反映しての内容で、当時の新しいロシア観が提示されている。

4) 文学性を指向した同時代の児童雑誌との比較

『赤い鳥』（赤い鳥社、1918.7～1936.8）には、ロシアの昔話が11話掲載され、「鷹のフィニスト」や「カマスの命令」などの読み応えのある本格昔話が紹介されている。また、ロシア作家の翻訳が多数掲載されており、大正期にはソログープ6作品、トルストイの民話3作品、チェーホフの「靴屋と悪魔」などが載っている¹⁹。

『おとぎの世界』（文光堂、1919.4～1922.10）には、昇曙夢や細井夕霞が再話したロシア昔話が21編掲載されている。1921年3月号は「ロシア童話号」と名付けられていることからロシアへの関心の高さがうかがえる。武者小路実篤の「新しき村」でトルストイの誕生日が祝われている報告もある（1920.8）。

『金の船・金の星』（キンノツノ社・金の船社、1919.11～1928.4）にも、9編のロシア昔話が見られる。トルストイの民話「馬鹿ばかのイワン（ロシヤ）」（山野虎市、1923.8・9）と、ドストエフスキーの紹介（大木雄三「悲しき夜かな 鶯ナイチンゲール」、1925.5）も掲載されている。

『童話』（東京堂、1920.4～1926.7）には、浜田廣介が翻訳したソログープの作品（1920.6）、クプリーンの創作（1922.10）などが紹介されている。原典を記していないがロシア昔話3編、ゴーゴリの「鼻」と「検察官」の改作（1923.7・8、1925.7）、エルショーフ「せむしのこうま」の再話（1925.8・9）も掲載されている。

これらの雑誌には、ロシアの昔話やロシア作家の作品が多く掲載され、高い評価を得ていた²⁰。『赤い鳥』『童話』ではこの時期ソログープの寓意的な作品が芸術性の高い童話のお手本として扱われていることが見てとれる²¹。ソログープは童心主義の成立ともかかわっていたが²²、童心主義は娯楽読物を中心とした『少年倶楽部』とは異なる児童観であった。一方で『少年倶楽部』で見られる政治や社会状況の報道的な作品は少なく、少数の日露戦争に関連した作品は、穏やかな回想や人情を描いたものであり²³、ロシア革命に関する内容のものはなかった。

4. 「その他」の中から

『少年倶楽部』『読者文芸』の「短文」（1925年3月号）に「ロシア人」というタイトルの高崎市の石田信夫の投稿が「優等」の一編として掲載されている。「セル地ラシャ」を覚束ない日本語で売りに来た「沈んだ顔をした露人」について書いたもので、秋田雨雀の「評」には「影のやう

なロシア人の姿が見えるやうだ」とある。身近に接するロシア人のイメージが、暗く悲哀を伴っていることが読み取れる例である。

5. 『少年倶楽部』に描かれたロシアのイメージ

ロシアに関係した記事からイメージされるロシアとロシア人像を以下のように考察した。

1. 日露戦争で勇敢に戦ったロシア軍。戦後10年以上が過ぎて、明治期のような侮蔑的な言説は影を潜め、勇敢で人道的であると描写されている。日露戦争の勝利は日本人の優越感と愛国心を強めるツールとなっており、日露戦記は好戦的な気分をあおる読物と化している。
2. シベリアやロシア人の多く住む満州は、旧来の冒険の地。『少年倶楽部』には南洋の冒険物語が多数掲載されており、シベリアへの関心は明治期の少年雑誌に比べると薄れているが、冒険小説では依然として少年が武者修行や冒険をする地として描かれている。
3. 粗野で乱暴な悪漢であるロシア人のイメージと、味方となって協力するロシア人のイメージが併存。宮崎一雨の小説では両タイプが登場、阿武天風の小説ではロシア人は戦友となる。筑波四郎作の探偵小説のスパイも、絶対的な悪には描かれないあいまいな存在。
4. 不幸せや悲哀感と結びついたロシア人像。革命後白系ロシア人が来日して、明治に比べると身近な存在になっている。行商のロシア人についての作文や、ロシア人混血児の手記などから、ロシア人が不幸や悲哀感と結びついていることが浮かび上がる。それはまた、日本人の優越感を増長させるものでもあった。
5. ロシア革命は、残虐な過激派の暴挙。革命は絵物語で揶揄されて、革命軍と戦ったコサックの少年はヒロイックに描かれた。レーニンやゴーリキーも、思想は抜きで波瀾万丈の生い立ちをしたとして紹介されている。革命後、飢餓状態にあるヴォルガ地方は恐ろしいイメージであるが、現地の直接的な情報が掲載されていないために実情は判然としない。

おわりに

1921年から編集を担当した加藤謙一によると、『少年倶楽部』は「面白くて為になる」内容により児童の徳育を目指した娯楽的な雑誌で、とにかく面白さと冒険と空想の読み物の提供を求められたとのことである²⁴。ロシアに関する記事は多いとは言えず、革命や社会主義、それにとまなう混乱といった現実のロシアについては、当時の米騒動や労働争議が同誌に掲載されなかったのと同様に、ほとんど扱われていない。

明治期には日露間の緊張が高まっていたこともあり、児童雑誌にもロシアの様々な情報やロシアの昔話や文学作品が掲載されていた²⁵。一方、1918(大正7)年に創刊した『赤い鳥』をはじめとする『おとぎの世界』『金の船・金の星』『童話』などの大正期の文芸的な雑誌には、トルストイの民話や、ソログープやチェーホフなどの作品が、無垢な子どもの姿を描いた文学として掲載され、ロシア昔話の紹介も多かった。また、大正期にはロシア文学がブームであり、ロシア昔話も鈴木三重吉の「世界童話集」シリーズ(春陽堂、1917~1932)をはじめとして多数紹介されていたが、『少年倶楽部』にはロシアの文学や昔話、トルストイの思想はほとんど登場しなかった。

『少年倶楽部』に見られる、日本の優越感を確認してくれる日露戦争や、活躍の場所としてのシベリアや満洲のモチーフは、明治以来、少年雑誌で多数採り上げられていた。また、日露戦争後、特に大正時代にはロシア革命による亡命ロシア人の存在もあって、ロシア人は没落した悲哀感を伴うイメージで描かれている。これらは大正ロマンの時代を背景に、異国情緒も加味されて、当時の大衆的な児童雑誌や絵雑誌に見られるロシア観・ロシア人観と共通している。

ロシア革命・ボルシェビキについては、過激派、市民の敵との認識が一貫しており、揶揄する作品が見られた。冒険小説に登場する悪人でもあり善人でもあるロシア人観は、情報の少なかった当時の大衆がロシアに抱いていた漠然としたイメージが反映しているとも言える。阿武天風のSF的な冒険小説「太陽は勝てり」に描かれた日本とソビエト間の将来の展望は、日本の領土的野心の新しいバージョンであった。娯楽を重視する『少年倶楽部』の方針により、ロシア革命をはじめとする海外や国内の社会情勢を正面から取りあげない編集姿勢は、昭和に入って国策を無批判に支持して、少年たちを戦争に駆り立てた誌面へと直結している。

堺利彦の書いたヴォルガ地域の飢饉救済を訴える記事、エロシエンコの作品などは、これまでのところ他の児童雑誌では見られない『少年倶楽部』独自のものであった。娯楽中心の雑誌にこうした作品が登場しているのは、読者投稿の短文の選考を担当していた秋田雨情が編集者の加藤と同郷であり、エロシエンコなど社会主義思想に近いところにいた人びととのつながりがあったことが理由のひとつと推測されるが、詳細は不明である。今後も調査を続けて分析を深めたい。

註

- (1) 『少年倶楽部』2巻4号(1915.4)のとじこみ。
- (2) 最盛期は、漫画「のらくろ」(田川抱水)や「冒険ダン吉」(島田啓三)、吉川英治や大佛次郎等の連載が掲載された昭和前期。62年12月終刊。
- (3) 外事警察の記録。澤田和彦『白系ロシア人と日本文化』(成文社、2007) p.1
- (4) ピョートル・ボダルコ「関東大震災とロシア」(長塚英雄責任編集『ドラマチック・ロシア』in Japan—文化と史跡の探訪—生活ジャーナル、2010) pp.118-120
- (5) 本間憲一郎「軍事探偵となつて黒龍江を下る」(1918.12)、同「狼と格闘した一夜」(1919.10.10、秋季増刊)。望月紫峰が代筆して冒険談風に描いた。
- (6) 丸尾美保「明治期の児童読物に描かれたロシア人像」(『梅花児童文学』15号、2007)参照
- (7) ノルウェーのナンセンやアメリカのARA (American Relief Administration) が救済活動をしていた。
- (8) 1921年11月に堺利彦等のよびかけで愛国飢饉同情労働会が発足、露国飢饉救済婦人有志会(与謝野晶子、中条百合子など)等が募金活動をした。宇奈根史「ロシア飢饉救済をよびかけた「種蒔く人」」『ドラマチック・ロシア in Japan』pp.100-102
- (9) 読者の実際の反応について、『少年倶楽部』の通信欄などを調査したが、掲載がなかった。
- (10) 『少年世界』1895年1月号に「わが幼年時代」など。
- (11) 丸尾美保「小波再話「世界お伽噺」「世界お伽文庫」所収のロシア昔話」(『梅花児童文学』14号、2006)参照

- (12) 博文館発行「世界お伽噺」叢書(寺谷大波編)の『笛吹愚助(露西亞)』(1909)に底本と明記。『藁の牛』(出版年不明)も同書より再話している。
- (13) 山田隆春のカラー口絵と挿絵入り。後にアフナーシェフ著、昇曙夢訳『マルコとワシカ』(大倉書店、1925)に所収された。
- (14) この作品は、「ハシナ姫(ロシア)」として、吉岡郷甫・高野辰之『世界お伽草子』(国定教科書共同販賣所、1908)にも所収されているが、挿絵は異なっている。
- (15) エロシェンコの創作集『人類の為に』(東京刊行社、1924)の解題には、「バイタル物語—インドでひろった話」も『少年倶楽部』に連載されたと記されているが、掲載が確認できなかった。
- (16) 上田信道「宮崎一雨の児童文学」(『国際児童文学館紀要』8号、大阪国際児童文学館、1993) pp.55-103
- (17) 『露艦隊全滅行』(武俠世界社、1913)は、ロシア海軍中佐セミョーノフの手記の日露戦争部分を、押川春浪とともに出版したもの。前書きに天風による翻訳であることを記す。
- (18) 上田信道「阿武天風の軍事冒険小説一日米未來戦の系譜を中心に—」(『国際児童文学館紀要』10号、1995) pp.37-41
- (19) 丸尾美保「雑誌「赤い鳥」掲載のロシア関連作品の考察」(『梅花児童文学』10号、2002) 参照
- (20) 『おとぎの世界』掲載の「童話と大人」(1920.4)で西宮藤朝が、昇曙夢の訳したロシアの「童話」を、大人が読んでも面白い話の例として挙げている。
- (21) 丸尾美保「ソログープ作品の日本における受容—「赤い鳥」を中心に—」(『梅花児童文学』11号、2003) 参照
- (22) 南平かおり「ソログープと日本」(『図説児童文学翻訳大事典』第4巻、大空社、2005) pp.257-266
- (23) 『赤い鳥』に、中村星湖「ある^{じゅん さ むすめ}巡査の娘」(1920.10-11)と騎兵大佐喜多信太郎「^{えいこうらいしふ}營口來襲」(1922.4)、『金の星』に久米玄一郎「^{はだか ぐん い}裸体の軍医」(1925.4-5)と同「^{すいくわ まちが}西瓜の間違ひ」(1925.7)などが掲載されている。
- (24) 加藤謙一『少年倶楽部時代—編集長の回想—』(講談社、1968) pp.16-17
- (25) 『少年世界』には、トルストイの「イワンの馬鹿」、ツルゲーネフの短篇なども掲載されている。丸尾美保「明治期「少年世界」にみるロシア—昔話および翻訳作品の考察—」(『梅花児童文学』9号、2001) 参照